

外堀 Q & A

Q. 琵琶湖と外堀はつながっていた？

A. 江戸時代の彦根は、城・町・湖が一体となって機能しており、城下町の人々の暮らしに湖が密接に関わっていました。松原湊に船で運ばれた物資は、松原橋をくぐり、城下の内船町（地図中⑮）・外船町（①）などで陸揚げされました。湊の周辺には、藩の米蔵や水主衆（船頭）の屋敷が広がっていました。



昭和 38 年、滋賀銀行彦根支店から見た山の湯付近（地図中⑮）。まだ堀の一部が残っていたことが分かる。（渋谷博氏撮影）

Q. なぜ外堀は埋められたの？

A. 外堀の姿を最も大きく変えたのは、戦後のマラリア対策による埋め立てです。戦前の彦根ではマラリアが猛威を振るっていたため、昭和 24（1949）年、彦根市はマラリア予防条例を制定し、撲滅に乗り出しました。その中で、マラリア原虫を媒介するハマダラ蚊の発生源のひとつだった、彦根城の堀を埋め立てることになったのです。昭和 24～28 年度の 5 年間で、下片原・中藪・長曾根町（地図中⑮～⑳）、外馬場町（⑥～⑩）、二番町・水流町（⑤～⑥）などの外堀を埋めるといった計画が立てられました。埋め立てには、市街地で集めたゴミが使われたようです。こうした対策の結果、昭和 29 年にはマラリア患者がゼロになりました。マラリア対策以外にも、市街地の開発や道路の拡幅によって、外堀が埋められていきました。昭和 9～10 年に外堀を埋めてつくられた道路です。護国神社前の道路（③）は戦後に拡幅され、外堀の一部が埋められました。高宮口御門（⑫）周辺は、それよりずっと以前、明治時代から少しずつ埋められていたようです。このように外堀は、時代の要請によって段階的に消えていきましたが、地面に刻まれた痕跡からかつての姿を想像することができます。

※マル数字は地図中番号。

Q 外堀探索 3つのポイント

1 古地図と比べて想像する

かつての外堀を知るための最もよい史料が「御城下惣絵図」です。彦根の町割は江戸時代とあまり変わっていないので、古地図と現在のまちを比べることで、どこに外堀があったのかが分かります。

2 水路をたどってみる

堀を埋め立てたとはいえ、かつて水が流れていたところを完全に埋めてしまったわけではありません。外堀跡には、小さな水路が残っています。水路は暗渠となり、地下を流れていることも多いです。水路をたどることで、外堀のルートを知ることができます。

3 地面のわずかな高低差に注目する

堀や土塁があったということは、地面に大きなデコボコがあったということです。堀がなくなっても、それを完全な平地にするには労力がかかりますし、そうする必要もなかったでしょう。外堀跡のあらゆるところで、地面をよく観察すると高低差を見つけることができます。

彦根城外堀跡へのアクセス

JR・近江鉄道 彦根駅から
護国神社（地図中③）まで徒歩約 10 分



「ふるひこねプロジェクト」とは？

まち遺産ネットひこねは、彦根のまちに残る歴史的な遺産を再発見し、紹介していく市民団体です。これまでに「鐘旭さんマップ」「彦根城外堀マップ」「花しょうぶ通りマップ」「七曲がりマップ」「伝馬町・川原町マップ」「本町・魚屋町マップ」「彦根駅前マップ」「足軽組屋敷マップ」を制作し、古地図を使ったまち歩きを楽しさを発信しています。

まち遺産ネットひこねホームページ http://www.geocities.jp/machiisan_hikone/

2012年 12月 20日 初版発行
2014年 8月 3日 第2版発行
2015年 11月 1日 第3版発行

制作 まち遺産ネットひこね（文・写真 鈴木達也）

参考文献

『彦根市史 下冊』（彦根市、1964年）／『新修彦根市史 第10巻 景観編』（彦根市、2011年）／彦根史談会編『城下町彦根一街道と町並一』（サンライズ出版、2002年）／矢守一彦『城下町』（学生社、1972年）
渡辺恒一「御城下惣絵図を読み解く」（歴史手習塾セミナー6・2テキスト、2011年）／丹波正博「旧彦根城下・長曾根口御門の景観復元に関する考察」（滋賀県立大学卒業論文、2009年）／田中良輔「城下町を歩く～長曾根口御門とその周辺～」（彦根市教育委員会文化財課・歴史探索ウォーク資料、2012年）／井伊岳夫「江戸時代における彦根城の堀について」（『淡海文化財論叢 第5輯』、2013年）

このマップの第3版は、井伊直弼公生誕 200 年祭市民提案事業補助金により制作しました。「御城下惣絵図」は、彦根城博物館の許可を得て掲載しています。作成にあたり、彦根市教育委員会文化財課・井伊岳夫さんの多大なるご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。

彦根城 外堀マップ

The Outer Moat of Hikone Castle

古地図で楽しむまち歩き

ぶらひこねマップ コース

2

彦根城には三重の堀があった

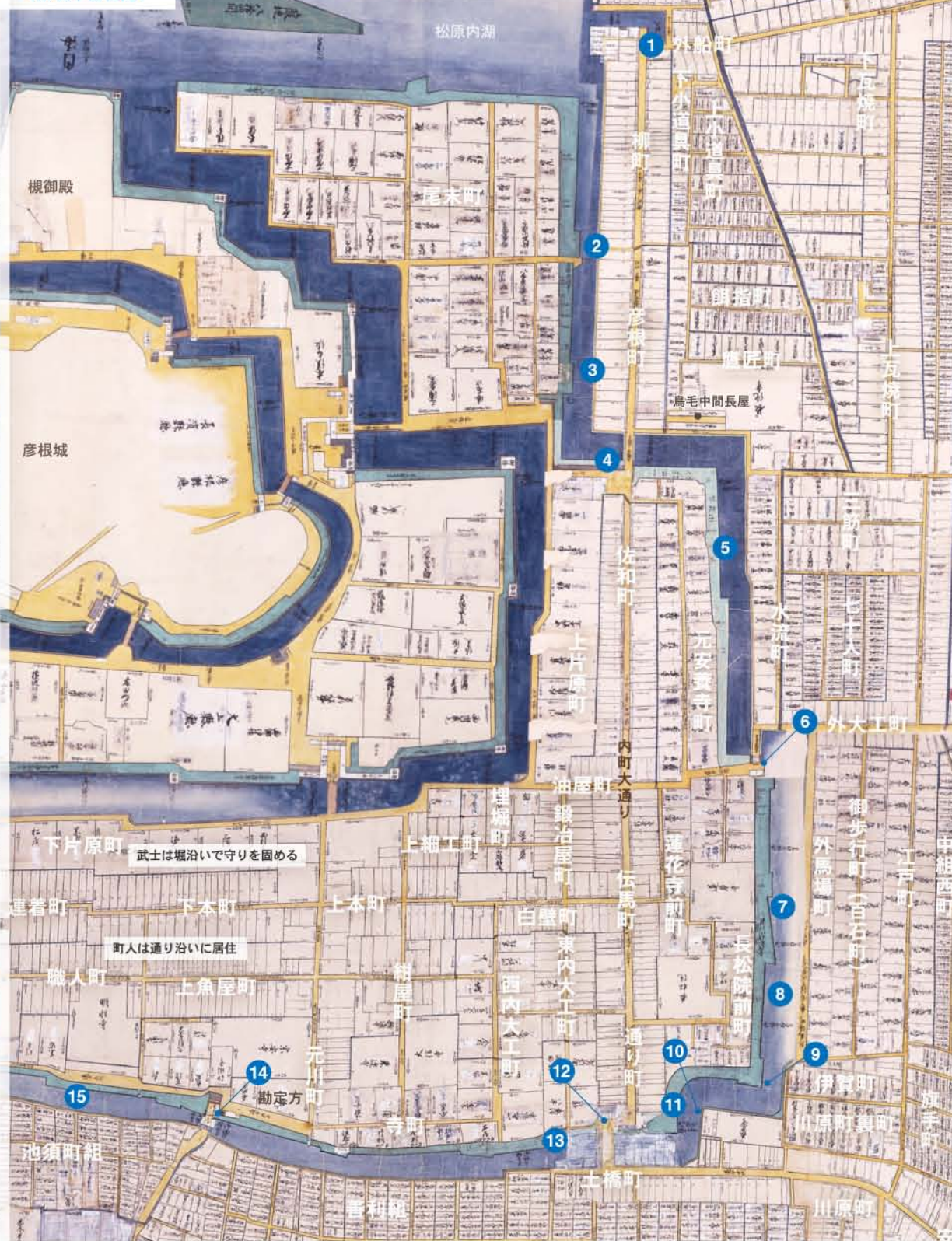
江戸時代の彦根城は、内堀・中堀・外堀という三重の堀に囲まれた大城郭でした。内堀と中堀は今も残っており、お城の雄大な姿を今に伝えています。一方、外堀は明治時代以降少しずつ埋め立てられ、現在は市街地として活用されています。



失われた外堀の痕跡を探そう！

しかし、土地には記憶があるといます。表面的には外堀はなくなりましたが、地形をよく観察すると、外堀の痕跡を見つけることができます。小さな水路や、わずかな地面の高低差が、現代に残された外堀の痕跡なのです。江戸時代の古地図「御城下惣絵図」と比べることで、地面に刻まれた外堀の記憶を探してみましょう！

江戸時代の彦根
(御城下惣絵図)



城下町から高宮宿方面へ抜ける起点となる高宮口御門跡。現在のりそな銀行付近に門があった。外堀に架かる橋が土橋だったため、門の外の一帯は「土橋町」と呼ばれた。この辺りは繁華街だったため、明治時代、いち早く堀が埋められた。

高宮口御門跡の近くにある料理屋の駐車場。地面の不自然な高低差は、土塁と堀のなごりだと考えられる。

池須口(本町口)御門跡。夢京橋キャッスルロードから昭和街道に突き当たる道は新しいもので、交番の裏から江国寺の門前を通るのが本来のルート。

昭和9~10年、外堀を埋めて「昭和街道」と呼ばれる道路がつけられた。現在の銀座町から長曾根町にかけて続き、4間(約7m)の道幅は今も変わらない。歩道の下には、水路が暗渠として残っている。

ごじょうかそうえず
「御城下惣絵図」とは？
江戸時代の彦根城下町の様子をもっとも詳細に伝える古地図。天保7(1836)年、彦根藩の普請奉行らによって作られました。屋敷の持ち主の名前が書かれているのは武家屋敷や寺院など、書かれていないのは町人の住まいです。道幅や堀幅、屋敷の間口などの寸法まで書かれています。実際には6枚の絵図に分かれています。合成して掲載しました。彦根城博物館所蔵。

- 凡例
- 外堀跡
 - 土塁跡
 - 現代の堀・水路

現在の彦根



琵琶湖からの舟が着いた外船町の舟入跡。大正から昭和初期にかけて埋め立て。近くに舟荷物の蔵が残り、恵比寿と大黒が屋根に飾られている。

市民会館前の道路はかつての外堀。よく見るとまわりの宅地よりも地面が低い。



護国神社前に残る空堀。もともとは前の道路まで含まれる広い堀だったが、戦後の道路拡幅で埋め立てられ、現在の大きくなった。



切通口御門跡。キャッスルホテルの裏に石碑がある。鳥居本宿からの道(彦根道)が内町に入る重要なポイントで、藩主が参勤交代でお国入りするときも、ここを通過して城内に入った。



外堀を埋め立ててできた街路。写真左の住宅地から道路までが堀で、右の住宅地は土塁だった。江戸時代の堀幅は14間半(約26m)。道路の左脇に水路が残っている。



銭湯「山の湯」の裏には土塁が現存。2015年の発掘調査により、高さ約5.5mの台形の断面で、堀側に犬走りがあったことが確認された。堀幅は11間半(約21m)だったが、細い水路だけが残っている。外堀土塁の貴重な遺構であるため、2016年、国特別史跡彦根城跡の一部になり、保存されることになった。



長光寺に残る外堀の遺構。周辺の高差が埋められたとき、ここだけ埋められなかった。東側の面の石垣は、もともと堀に面していたものを残している。



外堀の隅部。土塁跡の大きな高低差が残る。彦根城築城以前から、この辺りに「屋ヶ瀧」という湧き水があり、外堀の重要な水源だった。現在も水路に地下水が流れ出ている。



外馬場公園の敷地の大半が外堀跡。公園内に残る木々は、昭和20年代に堀が埋められるまでは堀端の並木だった。



市営駐車場に残る外堀跡。かつては駐車場の大半が堀で、堀幅は11~12間(約20~22m)だった。土塁が現存しているのは極めて貴重。



油懸口御門跡。商工会議所前の直角に折れる道が江戸時代のルートで、斜めに曲がる表の車道は、戦後につくられた新しい道路。

外堀 Q & A

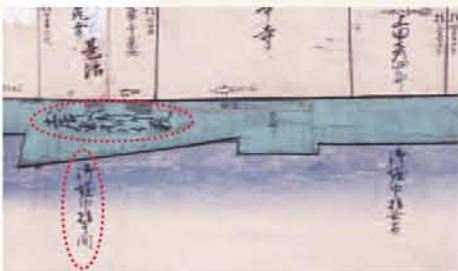
Q. 三重の堀の役割とは？

A. 堀は、城を外敵から守るためにつくられたものです。彦根城が築かれた当時、井伊家は大阪城の豊臣家に対して、徳川方の最前線の位置にありました。三重の堀と芹川は、京都・大阪方面の敵から城と町を守るような形になっています。

また、城下町を区分するのにも堀の役割です。内堀の内側は、城の中心部です。内堀と中堀の間の内曲輪は、井伊家の下屋敷や重臣の屋敷があったところ。中堀と外堀の間は外曲輪で、武家屋敷と町人の居住区がありました。外堀の外側には、下級武士や足軽、町人が住んでいました。

Q. 堀の幅はどのくらいだった？

A. たとえば蓮華寺の裏（地図中⑦）の土塁と堀を「御城下惣絵図」で見てください。「土居敷拾間竹藪」「御堀巾拾壹間」と書かれています。1間=約1.8mとすると、土塁の幅は18m、堀の幅は20mほどだったことがわかります。また、長曾根口御門の近くは土塁が6間半、堀が13間だったようです。なお、堀の深さや土塁の高さは、絵図から読み取れません。



「御城下惣絵図」より蓮華寺の裏

Q. 外堀はどんな姿をしていたの？

A. 内堀沿いや中堀沿いには立派な石垣がありますが、門の付近を除いて外堀沿いに石垣はなく、土塁がつくられていました。絵図には、土塁が緑色、堀が青色で描かれています。土塁の上は、少なくとも絵図が描かれた江戸時代後期には、竹藪になっていたようです。櫓などの防御施設はなく、素朴なつくりをしていました。2015年、山の湯の裏の土塁（地図中⑩）の発掘調査が行われ、高さが約5.5m、断面は台形であることがわかりました。土塁の上部は幅約4mで、土塁の下の堀側には犬走りか確認されました。

Q. 城の出入り口「御門」とは？

A. 彦根城の外堀沿いには、切通口御門、油懸口御門など、7つの出入り口がありました。いずれも、敵が侵入しにくいように、2回直角に曲がらないと中に入れないようになっていました。江戸時代には、御門が開けられるのは午前6時から午後6時までで、午後10時までは潜り戸が開けられ、それ以降は不審者以外なら潜り戸を開閉して通行させていたようです。



「御城下惣絵図」より油懸口御門

Q. どこまでが城でどこからが町？

A. 現在の彦根市民は、中堀の内側、つまり彦根東高校や裁判所のあるところは城の中、それより外は城外と認識しているのではないのでしょうか。しかし、外堀があった江戸時代の認識は違います。天保6（1835）年に彦根藩が幕府に提出した「近江国彦根城図」には、外堀までの範囲が城として描かれています。現在の市街地も、実は城の一部なのです。

Q. 外堀ができる前は？

A. 現在の芹川の流路は、江戸時代初期の彦根城築城のときに付け替えられたもので、それ以前は幾筋にも分かれ、現在の市街地は湿地帯でした。付け替え以前の芹川は、河原三丁目付近から船町方面へ流れ、かつての松原内湖に注ぐルートのほか、銀座町付近から船町方面へ流れるルート、銀座町付近から長曾根町方面へ至るルートもあったようです。

このルート上には、かつて川だったことに由来すると思われる「川原町」「元川町」という町名が残っていました。外堀は、陸地を新たに掘ってつくられたのではなく、芹川の旧流路のうち、銀座町-船町ルート、銀座町-長曾根町ルートを利用してつくられたものと考えられます。

Q. 護国神社の常盤橋はいつのもの？

A. 護国神社の鳥居前の空堀（地図中③）に、常盤橋という石橋が架かっています。実はこの橋、本当はもっと長かったのですが、途中で切断されているんです。橋に刻まれた文字を読むと、現在の石橋は昭和7年につくられたことがわかります。このころは現在よりも堀の幅が広がったのですが、戦後の道路拡幅で堀の一部が埋め立てられ、現在の幅になりました。その際、橋を架け替えるのではなく、切断して保存し、現在の姿になっています。橋の最高点が中心とずれていたり、橋のたもととの歩道に高低差があったりするのはそのためです。



外堀埋め立て前の常盤橋（渋谷博氏撮影）



同じ位置から撮影した現在の常盤橋

Q. 江戸時代に外堀はどのように使われていた？

A. 1745～48年ごろの彦根藩の記録によると、長純寺前や外馬場町の外堀（地図中⑤～⑧付近）は生けずりとして使われていたようです。生けずりは、朝鮮通信使の応接のときに出す魚などが飼われており、堀での魚釣りは禁止されていました。それでも魚が取り荒されることがあり、監視役を巡回させたという記録があります。ほかにも、堀の水で勝手に洗い物をしたり、ゴミを捨てたりする者がいて、藩が対策を講じています。一方、城下周辺の百姓は藻や泥の除去を任せられ、肥料として使っていたようです。

Q. 長曾根口御門はどんな姿だった？

A. 明治時代になって彦根城の取り壊しが進み、城内の建物は解体、売却されていきました。長曾根口御門は堀の対岸にある教禅寺に移築され、山門として昭和9年まで利用されました。その後、使われなくなった門の部材が本堂床下に保管されていたため、門の姿を図面で復元することができ、重厚な高麗門であることがわかりました。

また、門の跡地は、彦根市の歴史まちづくり事業によって整備が計画され、文化財課が発掘調査を行いました。その結果、道路に敷き詰められた砂利や、土塁の端の土留めと思われる石列などが確認され、「御城下惣絵図」に描かれているよりも土塁の規模が相当大きい可能性が出てきました（地図⑫）。



「御城下惣絵図」より長曾根口御門付近

平成	昭和	大正	明治	江戸時代	古代・中世
2007年	1997年	1925年	1889年	1800年	1600年
2006年	1972年	1948年	1884年	1858年	1591年
1999年	1969年	1945年	1878年	1853年	1089年
1987年	1963年	1937年	1871年	1850年	
	1952年	1931年	1868年	1836年	
	1949年	1927年	1868年	1815年	
			1868年	1810年	
			1868年	1800年	
			1868年	1799年	
			1868年	1677年	
			1868年	1644年	
			1868年	1622年	
			1868年	1615年	
			1868年	1606年	
			1868年	1604年	
			1868年	1603年	
			1868年	1602年	
			1868年	1601年	
			1868年	1600年	

彦根城と城下町のあゆみ

彦根寺（現在の彦根城）に白河上皇らが参詣する

石田三成が佐和山城に入る

関ヶ原の戦い。佐和山城が落城する

井伊直政が佐和山城に入る

井伊直政死去

彦根山に新しい城を築くことが決まる

彦根城と城下町の工事が始まる（第1期工事、鐘の丸が完成する）

このころ彦根城天守が完成する

大坂夏の陣。彦根城と城下町の工事が再開する（第2期工事）

このころまでに彦根城と城下町が整った表御殿（現在の彦根城博物館）がつくられる

七曲がりの町ができる

七曲がりの町ができる

榎御殿（玄宮楽々園）がつくられる

藩校稽古館（のちの弘道館）が設立される

彦根城表御殿に能舞台がつくられる

このころ松原にお浜御殿がつくられる

井伊直政が榎御殿で生まれる

当主の御下宿が完成する

御城下惣絵図がつくられる

井伊直政が彦根藩主となる

ペリー来航

井伊直政が大老になる

日米修好通商条約に調印する

井伊直政が暗殺される

（松田外郎の姿）

戊辰戦争 明治維新

彦根藩が全線通過し、彦根駅ができる

彦根高等商業学校（現在の彦根大学）が開校する

彦根港

（現在の旧彦根港）と回廊がつくられる

地蔵堂の建立

彦根聖徳太子堂（スミズキ記念堂）が完成する

本町（彦根町）が合併して彦根市が誕生する

太平洋戦争終戦

松原内湖干拓事業が終わる

マリア対策のため外堀の埋め立てが始まる

（地図中⑦のところに）

彦根城天守が国宝になる

NHK大河ドラマ「花の生涯」が放送される

新彦根港ができ、回廊橋が廃止される

元町に彦根市役所ができる

彦根城博物館ができる

世界古地図展が開かれる

彦根公園が完成する

夢の橋キヤッスルロードが完成する

四番町スクエアが完成する

国玉・彦根城築城400年祭が開かれる

彦根城下町全景

長曾根港の棧橋

彦根城天守

※写真はまち遺産ネットひこね所蔵の戦前の絵巻より